

アルフォンス・ミュシャ

アル・ヌーヴォーを代表する作家のひとつ、アルフォンス・ミュシャ。19世紀末のリトグラフ・ポスター全盛期に、ロートレックと並んで人気を博したことで、当時ミュシャが暮らしていたパリはもちろん、世界にファンを増やしていった。多くの人を引き付ける作品とはうらはらに、ミュシャは国境を越えて激しい人生を送っている。今回は複製画も横行するミュシャ版画の魅力について紹介しよう。

石版画の印刷技術がようやく完成しつつあった19世紀末、パリの街にはシュレヤロートレックからの多くのポスターがあふれていた。クリスマス之夜にあった一本の電話から、華やかなアーティスト人生がはじまった——アルフォンス・ミュシャのシンデレラ・ストーリーは、まことしやかに語り継がれている。

リトグラフの発展で生まれたヒーロー

現在チェコ共和国となっている南モラヴィアで生まれたミュシャは、ウィーンの舞台美術の工房で働きながらデッサン教室の夜間コースに通ったり、ミュンヘンやパリの美術アカデミーで学んだ。当時のヨーロッパは、アカデミックなものからネオロマン主義のムードが漂う時代もあり、日本の芸術の影響を受け入れたール・ヌーヴォーが流行していた。

そのころの画家たちは、モデルやその衣装を描くために写真を用いることが多かった。ミュシャもその一人。とはいえ、ミュシャの場合は表現のためのあくまで参考として写真を用いていた。当初は人から借りた写真機を使っていたが、1888年にミュンヘンからパリへ引越すにあたり返却し、1893年頃、自身の写真機を手に入れていた。

パリにあるルメルシエ・リトグラフ工房で働いていたミュシャは、先に書いたように突然一本の電話から、1894年にパリ・ルネッサンス座で上演された戯曲「ジスモン」のポスターを手がけることになる。34歳のミュシャが描いた女性は、当時50歳の人気女優サラ・ベルナル。ピザンティン風の装飾文様を基調とした人物像によるポスターは、街に張り出されたとなん人気を博した。おかげで営業が芳しくなかつた劇場も大盛況となり、即座にベルナル

がミュシャと6年間の契約をしたことから、寄せられた期待と信頼を感ずる。

高さ2メートルを超えるこの「ジスモン」は石版石2枚を上下につなげて印刷している。このときミュシャは、ルメルシエ・リトグラフ工房とポスターの販売をめぐってトラブルとなつたため、その後印刷はシャンブノワ・リトグラフ工房が行うことになった。

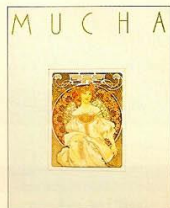
今もなお見ることが出来るミュシャ作品は、こうしたベルナルを描いたポスターだけではない。お酒などの商品のポスターやパレル、ストランのメニュー、クッキーのパッケージデザインなど手がけている。また、このほかにも、油絵、ステンドグラスや宝石デザインなど、幅広い活動をしていたようだ。また、ミュシャの潮流作品が多く出回った。そして日本では、サラ・ベルナルのポスターやサロン・デ・サンでのミュシャ展のポスターが、文芸美術雑誌

ARTIST'S DATA

アルフォンス・ミュシャ

Alphonse Mucha (1860-1939)

- 1860年 オーストリア帝国モラヴィア州イヴァンチツェ(現在チェコ共和国)に生まれる。
- 1873年 参加していたウスナーナド・オルリツィ合唱団の聖歌集の表紙を描く。
- 1875年 変声期のため聖歌隊を辞め、地方裁判所書記として働く。
- 1879年 舞台美術の工房で働くが、デッサン教室の夜間コースへ通う。
- 1881年 ウィーンのリンク劇場が焼失し、ミュシャ他スタッフは解雇される。
- 1883年 ウィーンのエポワ城の食堂と図書室の絵画を修復する。
- 1884年 クーエン・ペラシ伯爵の援助により、ミュンヘン美術アカデミーで学ぶ。
- 1888年 パリのアカデミー・ジノアンで学ぶ。
- 1894年 戯曲「ジスモン」のポスターを制作。
- 1896年 最初の装飾画(四季)を印刷。
- 1897年 パリのポティエールギャラリーで初個展。雑誌「ラ・ブリュム」の画廊「サロン・デッサン」で2回目の個展。会期中に雑誌「ラ・ブリュム」でミュシャが特集される。
- 1898年 「スペインの歴史」挿絵のため、スペインバルカン半島へ旅行。
- 1900年 パリ万国博覧会で、ポティエール・ヌーヴォー会館の装飾を担当。



- 1901年 レジオンドヌール勲章を受章。
- 1902年 「装飾資料集」出版。
- 1905年 「装飾人物集」出版。
- 1906年 マリアステイロワと結婚し、ともに渡米。
- 1908年 ニューヨークのジャーマンシアター(新ドイト劇場)の装飾を担当。
- 1910年 プラハへ帰る。
- 1918年 新生チェコスロヴァキア共和国の切手、紙幣、警官の制服のデザインを手がける。
- 1928年 「スラヴ叙情詩」全点をチェコ国民「ラハ市」に正式に寄贈。
- 1936年 パリの印象派美術館でミュシャ展開催。
- 1939年 7月14日、プラハにて死去。

【おすすめ資料】

- 「アルフォンス・ミュシャ作品集(新装版)」(鳥田紀夫監修、トイ文化事業堂発行、創英社・三省堂書店発売、2004年)
- 展覧会カタログとして編集された本書は、現在日本で入手可能な資料の中でもっとも充実している。

「明星」の表紙絵や挿絵として、しばしば使われた。パリ万国博覧会が開かれた1900年頃、日本では文学と美術が結びついた明治浪漫主義文学運動がさかんだった。そして当時の文芸誌では、アル・ヌーヴォー風の表紙絵や挿絵が流行していた。特に画家の藤島武や一條成美らがミュシャのファンであり、「画人月刊美術雑誌」と称していた「明星」の表紙絵に取り入れたと思われる。このようにミュシャ自身もポスターにとどまらない活動をしており、フランス国内外問わず、ミュシャは多くの画家たちに影響を与えようになった。

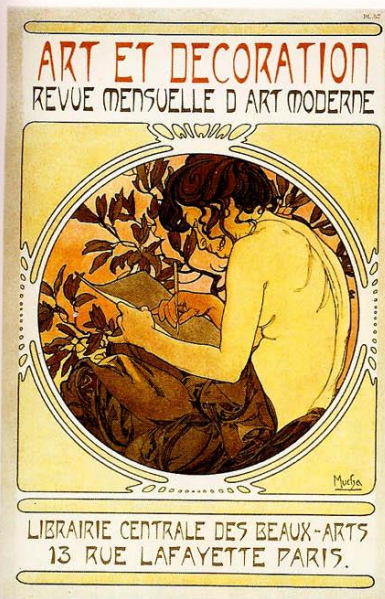
さて、ミュシャは1896年、最初の装飾パネル(四季)の制作にとりかかる。「装飾パネル」とは、情報が刷り込まれている「ポスター」と異なり、作品を家庭でも楽しむことができるように文字を入れないリトグラフ作品として販売されたものを指す。四季)は人気を博したため、翌年には同じ「四季」というタイトルで異なる絵柄の作品を制作し、成功。さらに1898年、装飾パネルで模様だった上部部分にチヨコレートの広告(シヨコラ・マッソン、シヨコラ・メキシカン)、下部部分に「カレンドール」を入れたものがつくられた。名作といわれる「黄金十二宮(アディアック)」も同様に、文字のあるものがないものがある。このように、当時代気が高かった作品は、同じ絵柄を多目的に使用していた。

このように精力的に活躍していたミュシャは、1902年「装飾資料集」、ついで1905年「装飾人物集」を出版した。これらには植物や人物の写実的なデッサン、図案化された植物文様、レタリングなどが取められている。多

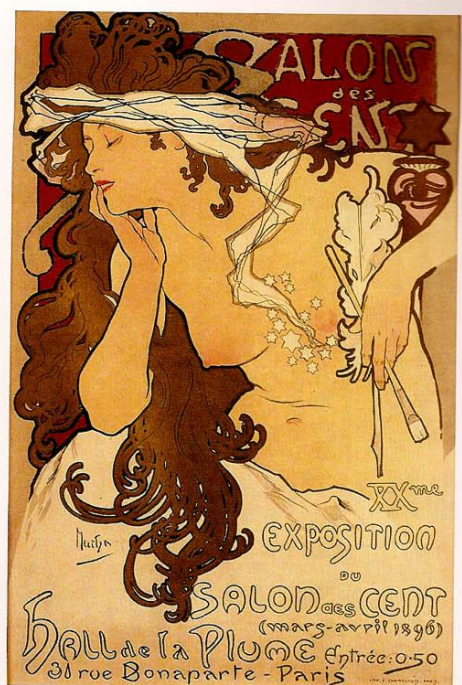
が、華麗な装飾と甘美な色彩の作品は、日本にもファンが多い。ミュシャが直接関わった「オリジナル」ではなく、「複製版」や「リクリエーション」と呼ばれる複製画も市場に多く出回っている。表参道にあるミュシャを専門に扱う「ぎやらいい自在堂の森恭子さんに話を伺ったところ、「複製版やリクリエーションといったものは複製つまりレプリカであって、オリジナルではありません。生前にもレプリカはつくられています。ミュシャが亡くなった1939年以降につくられた作品にエディションがつけられるようになります。生前の作品は、「エイスターの鐘」（1897年、ぎやらいい自在堂HP参照）以外、エディションはなく、刷込サイン、ミュシャ自身の鉛筆サインが入っているものがあります」とのこと。

現代のように印刷技術がすぐれていたわけでも、拡大・縮小コピーがあったわけでもない当時、ミュシャは自身の手で石版に描いていた。ミュシャが工房でどんな仕事を担当していたのか、刷ることまで手がけたのかどうか、はっきりとした記録はないが、「JOB」のように大と小のサイズがあるものも、それぞれの版にミュシャ自身が描き、工房で色をのせて刷っていたようだ。しかも当時の技術でつくることができるのは、せいぜい50枚が限度。現存するオリジナル作品はそんな貴重な一枚なのである。すべてオリジナルを扱うというぎやらいい自在堂の価格は、掲載の《サロン・デ・サン》などの代表作で、コンディションがよいものは400万円以上だが、小さなモノクロの作品であれば10万円より、カラーになると10万円台後半より、と案外安価で手に入れることができる。

没後の複製版（リクリエーション）は、制作方法自体が異なる。そのためミュシャ自身が描いたオリジナルと見比べると、その差は歴然。とくに「ミュシャの特徴でもある顔、特に目と鼻が違います」とのことだ。現在手に入らない



右・《サロン・デ・サン》リトグラフポスター 63.6×43.2cm 1896年
左・《裝飾資料集》より(PL57) リトグラフ 48×34cm 1901年



オークション出品作品から

作品名	技法	サイズ	制作年	作品情報	落札予想価格	落札価格	オークション名/開催地
Lorenzaccio	リトグラフ	202×70cm	1896年頃	レイド版2枚組、刷込サイン、刷込サイン・プリントリトグラフ工房(19)。余白有り。	US \$4,000-6,000	\$8,750	クリスティーズニューヨーク、ロックフェラープラザ Sale1964 クリスティーズインディアナ/2008年2月5-6日
The Flowers	リトグラフ	107×46cm	1890年	カラーリトグラフ4枚セット、刷込サイン・プリントリトグラフ工房(19)。コンディションA。	£10,000-15,000 (US \$20,000-30,000)	£25,000 (US \$49,050)	クリスティーズロンドン、サウスケンジントン Sale5398 Shipping & Vintage Posters/2008年6月3日

こうした激動の人生をたどったミュシャだが、ソフトな色彩の顔料を使い、《黄道十二宮》(ゾディアック)のようにグラデーションが掛かっていたり、ふんだんに金を使ったり、手彩色が施されているものもある。

「コンディションしないで、オリジナルの値段は全く違います。少し紙を繕っているだけで、値段が半値になったりします」とはいえ、「ミュシャのオリジナルはここ10年間、出回ることが少ない」とのこと。希少だからこそ持つていければ資産価値は上がるというが、そもそもそうめつたにオリジナルに出会うこともできないお宝、とも言える。値段にかかわらず希少なオリジナル作品を手に入れる貴重さにも、コレクション魂をそそる楽しみがあるのではないだろうか。

くの人たちに装飾や匠匠といった技術を広めていこうとした、ミュシャの意志をうかがい知ることができよう。

そしてシカゴの美術研究所で講義をするため、1906年に渡米。その後ニューヨークの美術学校へ移り、3年間の契約で、美字や色の調和、解剖、装飾とデザインについて教鞭を執りながら、アメリカで雑誌、新聞の挿絵、パリ時代同様に多くの演劇ポスターや肖像画も描いていた。しかしだんだんと生まれ故郷であるチェコへの思いが募っていく。翌年ポズナン交響楽団によるスメタナの交響詩「我が祖国」を聴いたのをきっかけに、大作《スラヴ叙情詩》の制作をはじめた。

チェコスロヴァキア共和国の成立時期と重なる1910年に首都プラハへ戻ったミュシャは、《スラヴ叙情詩》のために、コロレド・マンスフェルド伯爵から西ボヘミアにあるズビロフ城をアトリエとして借り、ポーランドやロシアなど「スラヴ地方」を取材した。こうして油彩とテンペラを併用して描いた《スラヴ叙情詩》20点の大作は、1928年に完成し、プラハへ寄贈された。

そして、晩年は戦争の渦に巻き込まれた。ドイツによるチェコスロバキア侵攻が起これ、ミュシャはゲシュタポ、ナチス・ドイツの国家警察による最初の逮捕者となってしまう。釈放されたものの、1939年にプラハで没した。

ポスターと装飾画と複製版

取材：文＝藤田千彩・アートライター

ぎやらいい自在堂
港区南青山5-13-1 アンリビル
T03-3498-1468
http://www.michamuseum.co.jp